

和本
大好き!



編集 ○ 日本近世文学会

2019.1.31

和本 Voilà

目次

- ▼和本リテラシーニュースとは…02
- 実践報告① 二又淳 四川外国語大学
- 出前授業「昔の文字を読んでみよう」の教材…03
- 実践報告② 真島望 成城大学
- 出前授業を経験して思うこと
- 授業と実践の一例として…05
- 実践報告③ 稲葉有祐 早稲田大学
- 筆跡・署名に注目した授業実践の試み
- くずし字をより身近に感じるために…08
- 教材と参考資料① 神林尚子 鶴見大学
- くずし字を読む・書く五十分
- 体験としての「和本リテラシー」…10
- 教材と参考資料② 牧野恒資 (大妻女子大学)
- 五十分講座で機能する教材を目指して…11
- 教材と参考資料③ 高松亮太 (県立広島大学)
- くずし字を読む・楽しむ
- 初級学回における出前授業を通して…12
- 教材と参考資料④ 勝又亜 明星大学
- 私のくずし字授業…13
- 教材と参考資料⑤ 佐藤温 日本大学
- 和本リテラシーへの導入としての出前授業
- 構成と教材について…14
- ▼出前授業のあゆみ(2017年度実施分)…16
- ▼出前授業の実施について…16
- ▼編集後記…16

あらゆる領域のヒントが詰まっている
古典籍（和本）をどう読み、理解し、活用するか。
和本教育の実践記録を伝える冊子、第四号！



ご自由にお持ちください

● 和本リテラシーニュースとは

ここでいう「和本リテラシー」とは、広い意味では、江戸時代末までに書写もしくは刊行された古典籍（和本）をどう読み、理解し、そして活用していくかといった、日本古典籍に関わる総合的な能力を指すものです。と同時に、狭い意味では、いわゆる「くずし字」（変体仮名）の読解能力を指します。

昨今、この種の能力はいつそう衰退の一途を辿っていますが、二十一世紀を迎えて、日本の現状が混乱を深めれば深めるほど、「古典」の重要性は増していると見るべきでありましょう。「古典」は文学だけではなくあります。あらゆる領域に存在します。さまざまなヒントが詰め込まれている「古典」を存分に理解し吸収するために、今こそ「和本リテラシーの充実を」と願わずにはいられません。

このリーフレットは、「和本リテラシー」の実践記録を集積し発信することで、古典もしくは古典籍を学ぶ方はもちろんのこと、教える立場にある方々にも一つの指針（モデルケース）としていただけるように願って発刊されます。

どうか、小さな動きがやがて日本各地で大きなうねりに発展し、老若男女がみな自力で、「古典」の豊かさを存分に享受できる日が来ますように。

二〇一五年七月

日本近世文学会 広報企画委員会

* 第一号「刊行にあたって」を転載

日本近世文学会出版部

今号は、実際の和本リテラシー活動に即した報告と実践に役立つ教材提示を目指した。くずし字理解のために配布した共通教材を左に掲載しておく。

昔の文字を読んでみよう

★身近な「くずし字」なんて読む!?



①



②

下のなまえだけで！
かっこよさそうな字を選ぼうね



『北斎漫画』初編より
(生命館大 ARO 古書籍 DB Ebi collection)

★ 自分の名前を「くずし字」で書いてみよう！

名前	くずし字
----	------

■ 練習用 ■

■ 提出用 ■

キリトリせん

氏名



図2



図3



図4

ころてんうり」と鼻山人「どふけ一筆がき」(稲垣進一「江戸の遊び絵」東京書籍)である。それぞれ体が平仮名で表わされている。現在は顔文字が広く行われているので、それとの類似性に触れると興味を引くだろう。「きのつらゆき」「山辺あかひと」といった有名な歌人の名前があるし、「ろくろくび」「さぎ」などは見るだけでも楽しい。プリントにはないが、十返舎一九『文字の知画』(国会デジタル)の「いぬ」は、平仮名を横に並べただけなのに、確かに犬の姿に見えて感心する。

共通教材「書いてみよう用ワークシート」には自分の名前をくずし字(変体仮名)で記す欄がある。その横に、気に入った文字絵を書き添えていた生徒も多かった。

⑤ 六歳のお姫様の遺書

「玉露童女追悼集」より、数え年六歳で亡くなった松平冠山の息女露姫の遺書の摺物である。稚拙ながら非常に味のある字で、「於」「止」「由」の変体仮名や、現在とは角度の異なる「く」の書き方などが使われている。

⑥ ろくろ首、身だしなみ

アダム・カバット『妖怪草紙 くずし字入門』(柏書房)基礎編レッスン4より。私自身、大学の授業や講座などで教科書として利用するテキストであり、妖怪は多くの人に興味を持ってもらえる題材である。「ろくろくび」では角度の異なる二つの「く」が使われる。「ミだしなミ」の太った「る」のように書く「な」は、板書で一気に入って書いてみるとよいだろう。

2 授業構成・注意点

五〇分の授業のうち、「自己紹介」「くずし字」⇨変体仮名って何？」「きそば」「おてもと」などの身近なくずし字」の説明で一〇分程度、最後の一〇分を、「自分の名前を「くずし字」で書いてみよう」とアンケート記入の時間にあてるといふ共通の設定があったので、各自が用意する資料の授業時間としては三〇分程度がめどとなる。実際これだけの資料をゆつくりと説明する時間はなかつた。

た。①②は資料を眺めてもらう程度で、③④⑤⑥を急ぎ足で説明した。時間との戦いとなり悩ましいことであつた。

和本に実際に触る機会を設けると、生徒たちが喜ぶことは確かである。日本古典文学会の赤本・黒本・黄表紙の複製本や安価で入手できる往来物（昔の教科書）を、気楽に回覧する形をとつた。複製本と原本の違いに興味を持った生徒もいた。

実践報告 2 出前授業を経験して思うこと ——模索と実践の一例として

真島 望（成城大学非常勤講師） MASHIMA Nozomu

稿者は、二年続けて（二〇一五年度・二〇一六年度）、日本近世文学会による、くずし字についての出前授業（於桐蔭学園）に講師の一員として参加した。以下は、主に二〇一六年度参加時（二〇一七年二月十六日）の授業実践の報告である。

一 概要

担当したのは中学男子部の三年生、人数は四十七名。事業としての授業目的に従いつつ、個人的には、「くずし字と、受講者の生活・経験とをいかに結びつけるか」ということを目標として授業を構成・準備した。全体の大まかな流れは、表1・2をご覧いただきたい。

二 授業の実際

それでは、どのように授業を進めたかについて、表1の順序に沿

って、もう少し具体的に述べよう（「自己紹介」は省略）。

くずし字とは何か これは、導入として講師全員に共通するパートながら、方法は各人に委ねられている。短時間で説明するのは困難だけれども、くずし字を読むことの動機付けとして、軽視は許されず、相応の工夫を要する。稿者は、①「くずし字」の定義の確認・

②仮名の歴史解説、の二点に絞って概説を試みた。

すなわち、「くずし字」のうち、今回特に扱う変体仮名について、現在身近な正体仮名との相違点を確認し（①）、その上で、その変体仮名の読みづらさの原因に繋げるため、漢字由来の仮名の成り立ちを説明した（②）のである。

すると、字母の豊富さが読みづらさの大きな要因で、それに慣れてさえしまえば、必ず読めるようになるかと理解してもらえたようだ。そして、近代以前の様々な文献を読む能力は、人文科学系のみならず自然科学系学問を志すにあたっても有益だと、その意義について補足。やはり、日本語（とその歴史）についての知識は、いかなる

表1: タイムテーブル

内容	所要時間	使用教材	備考
1 自己紹介	1分		全クラス共通
2 くずし字とは何か	10分	A・C	
3 身近なくずし字を読む		A・B・C	
4 和本に触れる	29分程度	C	講師独自
5 昔の字を読む	10分	B	全クラス共通
6 自分の名前をくずし字で書いてみる 付: アンケート			

※「使用教材」のアルファベットは、下の「配布資料」のそれに対応する。

表2: 配布資料

共通教材	A くずし字一覧表
	B 身近なくずし字+書いてみようワークシート(アンケート含む)
独自教材	C 「昔の字を読んでみよう」(空欄補充形式、A3 両面刷、図2)

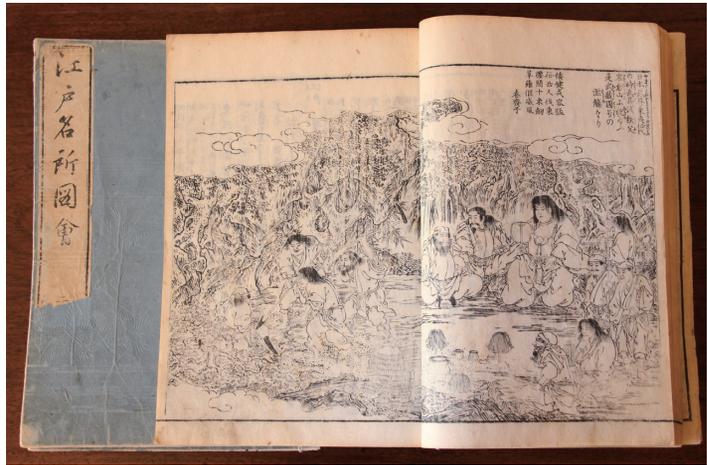


図1 使用教材(架蔵『江戸名所図会』)

道を志すにせよ重要なのだと伝えたい。ここは、どうしても一方的になりがちの内容なので、できる限り簡潔にし、速やかに次に移るのが肝要。**身近なくずし字** 続いて、教材A・B・C(表2)を併用して、くずし字が、実は考えているよりも身近なものだと認識してもらおうことを目指した。

その軽さや虫損に関心が集まるなか、独特の「匂い」に興味をもつ猛者も現れる。文字通り五感を駆使して受け止めようとする姿勢に、感嘆すること頻りであった。
使用したのは架蔵の『江戸名所図会』(地誌、大本七巻二十冊、齋藤幸雄ほか編、天保五(一八三四)・七刊、図1)。端本も加えたので、二人一組で一冊などとするれば、ほぼ全員が触ることができ

共通教材もあるが、稿者は、自分の祖母(明治生まれ)宛の葉書を実例として、その文面や宛先の表記にくずし字が用いられているのを確認。実際の生活の中で用いられていたのは、自分と無関係な漠然とした「むかし」ではなく、祖父母という、現在の我々に近接する世代でのことなのだと感じてもらうためである。
これは効果的で、アンケートには、自分の祖父母(宛)の手紙も見せてもらいたい、などという感想が散見した。
読んでみよう昔の文字・触ってみよう昔の本 最後が完全に各講師の裁量に任せられているパートである。まず、「百聞は一見に如かず」で、和本を受講者に配布して、自由にその印象を挙げてもらった。

稿者が近世地誌を中心に学んでいることのほか、挿絵が多い方が、生徒たちは興味をもちやすかろうと考えたこと、さらにその絵が、現在のよく知っている地域であれば、より自分たちに引きつけて考えられるのではと予想したことなどが、選定の理由である。

どのような本なのか、簡単に解説したのち、教材Cにあらかじめ用意したその挿絵四点について、そこに書き込まれるキャプション

図2 当日配布の独自教材

昔の文字を読んでみよう

一 はじめに(変体仮名の由来)

変体仮名とは何でしょうか。
 「假名」というのは、我が国が昔使っていた文字で、漢字に比べて、読みづらくて、かきにくい文字であつたから、今では、変体仮名は、書かれていない文字で、この形であつたのだよ。

くずし字 = 草(1) 再読漢字 我がが使役したのは相陰
 (2) 正体仮名 仮あいうえお、オ、オ、オ、現在、我がが使用する仮名

明治33年～
 (「小学校令」)
 正体仮名 仮あいうえお、オ、オ、オ、現在、我がが使用する仮名
 新しき字

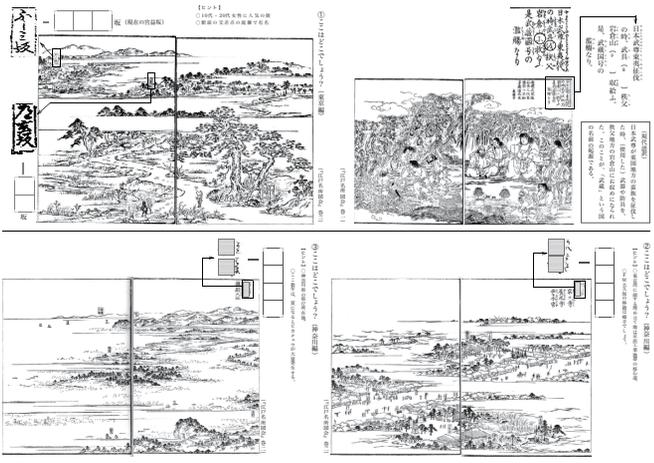


これは、同じくならぬ、変体仮名と正体仮名とはどうして、まがのうに違ふのか、ひがが成るのか、を説明してあげよう。

① 万葉仮名 日本語の発音を漢字のものとする
 ② 片仮名 漢字の羅から出します
 ③ 平仮名 漢字を横に割ります
 ④ 新しき字 漢字を横に割ります

を読んでいった(今回は変体仮名中心なので、実際には各キャプションのふりがな)。

そのうち三つの場面は、渋谷・川崎・横浜を描いたもの。若い世代に馴染みのある場所、また生徒の生活圏も考慮して選定するよう留意した。ヒントを示しながら誘導し、正解がわかると、描かれた場所の現状との落差に、皆驚いていた。



最後に共通教材の名前書きとアンケートを行う。各自とても積極的に取り組むので、少なくとも10分は残したい。

三 全体としての印象

以上が授業の流れである。

さて、実際に授業を担当して強く感じたのは、中学生たちは「古典」についての知識を欲しているということである。皆、とても意欲的で、このような、「二点を深く掘り下げる」内容に対する熱意が感じられた。

もちろんそれは、受け入れ側たる桐蔭学園の高い教育レベルや、同校の先生方の細やかな御配慮があったからこそなのは言つまでもないが、稿者は同様の印象を勤務先での授業時にも受けるのである。

一方で伝統を重視するなど空々しく口にしつつ、実際には官民ともに教育の場における「古典」というものを冷遇し、その結果として、若い世代が興味をもちづらくなっているのは事実だろう。しかし、一般に考えられているよりも、彼ら彼女らはそういう知識を求めている。モノとしての「古典」に触れ、多角的な関心を高める機会を増やしてゆくことが重要であり、「和本リテラシー」の出前授業は、それを実現する貴重な場だと、この経験を通じて改めて感じた次第である。

〔付記〕二〇一五年度の授業後、桐蔭学園の先生方に様々御教示いただいたことにより、次年度の授業改善に活かすことができました。改めて心より御礼を申し上げます。

実践報告 3

筆跡・署名に注目した授業実践の試み

——くずし字をより身近に感じるために

稲葉有祐（早稲田大学） INABA Yusuke

二〇一六年二月十三日土曜日、和本^{わほん}リテラシー普及の出前講座のため、横浜市の私立中高、桐蔭学園を訪れた。当日の講師は青山英正氏、井上泰至氏、小林ふみ子氏、福田安典氏と筆者の五名。本誌二号収載の井上氏による実践記録にもあるように、講座は学力試験を終えた時期の中学三年生が対象で、当該年度では同十六日、二十二日を含めた計三回、全十三クラスにわたり実施された。講師は筆者を含め十三名で、講座タイトルは「昔の文字を読んでみよう」。時間は五十分である。

中学生に何をどのように伝えるか。講座に先立つ一月三十一日に打ち合わせが行われ、相互に検討・確認をした。打ち合わせで掲げられた講座の目的は「くずし字を読みながら、古典の世界の意外な面白さを発見したり、広がりを実感したり、現在の生活や学びとのつながりを発見したりすることによって、古典に関心を持たせる」こと。講師それぞれ専門もあり、内容は各担当者に委ねられている。ただし、話し合いの中で、共通の学習事項と方向性を決める必要性が指摘され、構成として、冒頭に自己紹介、変体^{へんたい}仮名^{かみな}と字母^{じふ}の説明、身近なくずし字の話を据えることとなった。身近なくずし字とは、例えば、蕎麦屋の看板に書いてある「幾楚^{いくそ}者」の文字などで、

これは看板の絵を見せれば蕎麦屋だと分かるものの、実際に何と書いてあるか読むことはできない、いわば「記号と化した」変体仮名(「飯間浩明氏「街のB級言葉図鑑」朝日新聞、二〇一八年三月二十四日)といえるものである。このような例を通して、生活の中にあるくずし字への関心、そして解読することの面白さ・喜びを喚起できればという狙いであった。ゴール地点の設定については、まとめとして、変体仮名で生徒自身の名前を書かせてはどうかということ提案した。それは、くずし字を「読む」作業に加え、生徒個々に関わる形で積極的に「書く」体験を組み入れることによって、少しでも主体的に受け止めてもらうことができるのではないかと考えたためであった。同様のアイデアを持っていた講師の方もいらつしやり、講座進行の大枠は決まった。

さて、講座当日の担当クラスは生徒数二十八名、まず、導入として、自己紹介を兼ね、江戸という時代と和本について、口承・写本・板本から現代の電子媒体といったメディアの話を織り交ぜつつ解説することから始める。次に、現在使用されている平仮名を字母から確認し、さらに一覽表で変体仮名の多様性を示した後、身近にあるくずし字を解読する。くずし字を読むに際しては、「筆跡」についての問いかけもしてみた。「あなたはアノヒトの字を知っていますか」というものだ。「アノヒト」とは、友人知人、あるいは芸能人でも良い。とにかく、筆跡が頭に浮かぶか。インターネットはじめ、メール・LINE(ライン)等が情報交換の主となっている現代にあつて、くずし字に興味を持たせるための礎石として、文字と書き手との問題に目を向けさせる試みであった。

くずし字読解のトレーニングは、筆者の専門分野(俳諧)から、芭蕉句の短冊を題材に進めた。先の筆跡の問題とも絡めながら、「芭蕉全図譜」(岩波書店、一九九三年)をもとに、「古池や」句短冊三種【図】を提示する。生徒にとつては、読めない部分が少なからず



【図】(『芭蕉全図譜』より)

あるが、芭蕉の句ということで、すぐに知っている句と気付いたようだ。そこで、読めない変体仮名に関しては、一覽表で確認し、並べた短冊で比較・補完させながら学習した。例えば、「ふる池」の「ふ」について、Aでは「不」、B・Cでは「婦」、また、「水の」の「の」については、A・Bでは「乃」、Cでは「能」を字母としている。漢字と仮名についても、「蛙」(B・C)と「かはつ」(A)、「飛込」(A・B)と「飛こむ」(C)、「首」(A・C)と「おと」(B)のように対照させ解読させる。作業を進める中で、「どこで蛙は何匹飛び込んだのだろうか」といった句の解釈・イメージの問題にも触れつつ、その表現の可能性について話した。

短冊の解読において、最後にA・Bの署名「はせを」に注目させる。敢えて漢字ではなく平仮名表記を用いている点(さらに言えば、歴史的仮名遣いでは正確には「はせう」とすべきところ)に芭蕉の気取りとタンデイズムを感じ取ってもらい、その上で講座のゴール地点である変体仮名を用いて名前を書く作業に繋げていった。

講座後、いただいた感想に「最初は昔の言葉とはいえ、同じ日本語なので、同じようなものかと思っていたが、江戸の平仮名一覽表

を見て、まるで外国の文字のようだと感じた」とあったが、やはり、生徒はまず平仮名が現在のように「種類ではないことに途惑い、驚く。しかし、「江戸時代の頃までは人々は色んな仮名があったことを知って自分も覚えたいと思った」、「平仮名も今みたいに「種類ではなく、一文字に二、三種類あってもよいと思いました」など、くずし字（変体仮名）を好意的に受け止める生徒の感想も多く届けられた。そして、「自分の名前のかずし字が分かったことがうれしか

った」、「意外とくずし字がかっこよかった」と言った声も。この名前を書くという方法は、字母を替えてみるよう指示することで複数回にわたりに行うことが可能で、一方、その作業を経ることで、生徒においても、「はせを」のような、自身で気に入った字体に巡り合うことができるかもしれない。本講座を期に、くずし字に興味を抱き、豊穣な古典世界への関心を高めてくれたとしたら幸いである。

教材と参考資料

1

くずし字を読む・書く五十分
——体験としての「和本リテラシー」

神林尚子（鶴見大学） KAMBAYASHI Naoko

二〇一七年二月・二〇一八年二月の二度にわたり、横浜市にある桐蔭学園の中学生を対象に、和本リテラシー出前授業に参加させて頂く機会を得た。主に反省ばかりではあるが、その経験を報告して御教示を仰ぎたい。

出前授業の共通教材として、(一)身近なくずし字を読んでみよう（暖簾の「ぎそは」等）、(二)自分の名前をくずし字で書いてみよう、というものがある。特に桐蔭学園では、書道に力を入れておられる校風もあってか、名前を書いてみる課題は大いに盛り上がり

た。見慣れているはずの自分の名前も、複数の仮名の中からどれを選び、組み合わせるかを考えることで、新鮮なものと感じてもらえた様子が窺えた。

これに加えて、講師各自が用意した資料でくずし字の読解に取り組んでもらうこととなる。時間配分を考えれば、くずし字の成り立ちから丁寧に辿る余裕はもとより



配布プリントの一部（2018年）

私が用いた資料は、表面が①の補助資料で、裏面が③用の影印資料である。詳しく説明すると、表面は覚えて欲しいキーワードとしてa和本、b和本リテラシー、c変体仮名を挙げる。a和本は、定義種類（版本と写本）、作品数、ジャンルの項目から成る。作品数は空欄で、生徒に考えてもらっている。作品・ジャンルの多様性の理解を意識したものとなっている。b和本リテラシーは、「和本」を読むために必要な能力として、古文の読解能力（歴史的仮名遣・古語・古典文法の知識）と「くずし字」の読解能力（漢字の草書体、変体仮名の知識）を示す。前者は中学・高校で学習するが、後者は一生涯はない人が多いことを指摘し、その上でくずし字に「変体仮名が読めれば、多くの和本が読めることを伝える。c変体仮名は、誕生した経緯と種類を示す。とくに小学校令施行規則が定められた年を空欄にし、いつ生じたか具体的に理解させる。

裏面は③で用いる和本の影印である。教材選びとしては、和本リテラシーが対象とする和本が文学作品に限定されないことを前提に、中学生にとって身近なものから選ぶことにしている。二〇一八

教材と
参考資料

3

くずし字を読む・楽しむ ——桐蔭学園における出前授業を通して

高松亮太（県立広島大学） TAKAMATSU Ryota

中学校や高等学校における和本リテラシー活動の主眼は、くずし字を読めるようになることではなく、くずし字という未知との出会いを通じて、古典の豊穡な世界への関心を高めてもらうことにある。平成二八年に桐蔭学園で行った出前授業でも何より意識したのはこ

年は中学校男子部を担当したが、一六年に用いて反応がよかった松岡能一著『新編算学稽古大全』（天保四年再板本）を再び用いた。具体的な箇所は「大数・小数」と中学生が学ぶ三平方の定理にあたる「鈎股適等紀元」である。一六年は「鈎股適等紀元」を③で用いたが、一八年は①で和本のジャンルの多様性を示す際に、和算の本として「新編算学稽古大全」を紹介し、その上で中学生にも身近な内容を含むことを知ってもらうために用いた。一八年の③では「大数・小数」を読んだ。漢字の振り仮名を読ませるかたちだが、漢字に振り仮名があることが多いこと、漢字が読めなくても振り仮名で読めたり、変体仮名があまり読めなくても漢字から判断することができたりするという例として役立てた。

五分は短く、③用資料は、柔軟な対応が可能な単語や短文のものが望ましい。また、①用資料も学生に変体仮名を学ぶ意義を理解してもらうのに最低限の内容であり、どこを削ればよいのか、初回以来の悩みの種である。



『道化百人一首』より
(早稲田大学図書館蔵)

のことであった。対象は中等教育学校の中学三年生（男子のみ）である。

導入として、共通教材を用いて「きそは」「おてもと」など身の回りにあるくずし字を紹介し、現在の生活にも息づいていることに気付いてもらったうえで、『小学唱歌集』（明治一四年刊）所収の「君

詳細について、順を追って説明して行く。

①一回限りのくずし字出前授業は、生徒にとつて必要性の薄いものである。そんな彼らに一時間つきあつてもうらためには、動機付けが必要である。私の場合、まず、「英語はけつして受験勉強のためのお勉強ではない。日本全体がガラパゴス化している中、語学こそ世界とつながるツールである」と説く。そしてくずし字も、過去の日本と繋がるツールであると訴える。

②そしてレクチャーに入るが、最初に、くずし字のコツを三点だけ説明する。

① すべての平仮名には字母じぼがある、ということ。字母を頭の片隅に置くと、さまざまなくずし方に対応できる、ということころまで説明する。

② 一つの音に対して、複数の字母があるということ。これは「あ(安)」「ア(阿)」など、平仮名と片仮名とで異なる字母の音を例に挙げるとう理解してもらえらる。

③ くずし字はつながる(連綿れんめん)ということ。いくつか単語の例を見れば良い。ちなみに連綿の単語例を拾つには、江戸の仮名遣研究書が便利である。たとえば河崎清厚編『雅言童諭がげんどうご』(一八三四年刊)。早稲田大学古典籍総合データベースでpdf画像が公開されている。

教材と
参考資料

5

和本リテラシーへの導入としての出前授業 ——構成と教材について

佐藤 温 (日本大学) SATO Atsushi

③ グループ演習で配布するテキストに、私は鳥山石燕とりやませえん『今昔画こんじやくが図続百鬼ずぞくひやくま』(一七七九年刊) および同『今昔百鬼拾遺こんじやくひやくまひやく』(一七八一年刊)の中から二図を選んで(図版参照)。理由は、絵入りであること、妖怪画が出てくるので生徒たちが興味を持つてくれるのではないかと、という期待と、文字が小さい割に読みやすいからである。もちろん、同時にくずし字の一覧表を配る。プリント上欄には、穴埋め形式でヒントを与えてある。一時間では、マスターすることよりも、成功体験の方が重要だと考えるからである。読解のさいは、かならず机を移動してグループワークをさせる。その間、講師の私はまず黒板に穴埋め問題をそのまま書き写し、残り時間は机間巡視に徹する。何度も巡回し、どんどんヒントを与えて、読めたら褒める。

④ 時間が来たら答え合わせ。グループを順に当てていけば、当てられた生徒が答えられなくても、同じテーブルの友達が教えてくれる。最後に、生徒に自分の名前をくずし字で書かせる。そのさい、「でさるだけ、今の平仮名とは違う字母を使うこと」というハードルを一つ課すだけで、生徒の目の色も変わってくる。

繰り返しになるが、私が心掛けていることは、成功体験を楽しんでもらうことである。生徒たちの心の中で、「ああ、くずし字を読んだことがあつたつな。楽しかったな」と思い出せるくらいの所に留まってくれば、一回の授業としては大成功だと思っている。

去る二〇一八年二月に桐蔭学園にて行われた和本リテラシー講座で、私は中学校男子部のクラスを担当した。まず、各教員に共通す

る授業の流れとしては、①くずし字（変体仮名）とは何かを説明する、②身近なくずし字を読んでみる、③昔の文字や本に触れる、④自分の名前をくずし字で書いてみる、という内容を基本とすることが事前に指示されていた。

そこで、①では近世の版本の影印の漢字仮名交じり文を例に挙げ、生徒に「読める文字」と「読めない文字」を確認してもらうこととした。具体的には、筆者架蔵の絵本から絵に簡潔な説明の付された箇所（図参照）を取り上げ、今日一般に用いられる漢字・仮名で書き直したものを併せて示したのだが、原文中の生徒にとって読み難いと思われる文字（現代の仮名で用いられない字母に基づく仮名など）にあたる箇所は空欄とし、それらを想像して読んでみるように促した。こうした例を通して、昔は一つの音に対して複数の字母に由来する複数の仮名があり、それらは様々にくずした形で書かれていた、というような内容を説明し、近世に一般的に用いられなくずし字の一覧表を見ることでその種類の豊富さを実感させることができれば、まずは第一段階として十分なのではないかと思われる。なお、今回はその上で、かつてこうした文字が存在した背景として仮名の歴史を簡単に紹介したのだが、これは授業時間などに応じて分量を調節しても良いであろう。

そして、この後は実践的な活動となるが、②では先のくずし字一覧表と見比べながら、割り箸の袋の「御手もと」や蕎麦屋の暖簾の「きそば」を解読した。ここでは、単に読むだけではなく字母の確認を行うことが肝要である。それから、③では筆者架蔵の和本から適当なものを見繕って持参し、生徒一人ずつに渡して自由に触れてもらうこととしたのだが、古めかしい本を手にとって大ききさや重さをはじめとする特徴を実感することは、生徒には新鮮な体験であったようである。また、④はくずし字一覧表を参照しながら、筆ペンを使って自分の名前をくずし字で書くというのだが、くずし字の形の

特徴を自らの手の動きを通して知ることができるという点において、この方法は効果的であると思われる。（なお、②と④の教材ならびにくずし字一覧表に関しては、共通教材を用いた。）

授業の方法について補足すると、体験型の学習という性質から、机を島状にして

グループを作ると生徒間で教えあう機会が生まれるなど有効であった。また、当日は以上を五十分で行ったのだが、実践的な活動は時間を要することもあり、内容的に細かい点まで触れることは難しかった。ただし、①④の各内容の重要性を考えると、時間を理由にいずれかを単純に省略することはあまり望ましくないとわれ、それらを適切に盛り込みながらくずし字や和本にまつわる事柄を端的に説明していけるような、短時間の授業ならではの到達目標と進行を意識する必要があると感じた。授業後の生徒の感想には、例えば「同じ読みの仮名文字が複数あると知って驚いた」といった内容のものが多く見られたが、まずはこうした好奇心を少しでも引き出していくことが、和本リテラシーへの導入として本授業に求められることなのではないかと考える。



『絵本初心柱立』より。筆者架蔵本。例えば「千里①竹林／②③んで」という形で示した文から、空欄部①・②・③に入る文字を想像する。

▼出前授業のあゆみ（二〇一七年度実施分）

◆和洋九段女子高校（高三）

二〇一七年六月一六日（金）

神作研「江戸の本いろいろ見て、さわって、読んでみよう」

◆桐蔭学園中学校男子部・同女子部・中等教育学校（中三）

「昔の文字を読んでみよう」

①二〇一八年二月二〇日（火）

石塚修、佐藤温、牧野悟資、有澤知世、二又淳、伊與田麻里江、小林ふみ子

②二〇一八年二月二三日（金）

宮本祐規子、土屋順子、紅林健志、勝又基、神林尚子、藤井史果

◆名古屋大学教育学部附属中学校（中一）

二〇一八年三月二三日（火）

加藤弓枝・三宅宏幸「くずし字をよんでみよう」

◆名古屋大学教育学部附属高等学校（高一）

二〇一八年三月一五日（木）

加藤弓枝、三宅宏幸「くずし字をよんでみよう」

▼出前授業の実施について

日本近世文学会では、くずし字の読み方や和本を知っていたら、く一助として、学会員を講師とした出前授業を実施しています。主たる対象は小学校・中学校・高校。期日・時間等はご相談下さい。講師派遣の諸費用は、原則として学会が負担します。左記アドレスまで、ごうそお気軽にお問い合わせ下さい。

広報企画委員会 【E-mail:koho@kinseibungakukai.com】

編集後記

▽くずし字を読み、和本についての知識を伝える和本リテラシー活動を学会として推進してこるなかで、そうした活動の普及と発展のためには、具体的な実践報告と適切な教材が必要であるという認識を持つに至った。▽今号では、そうした意味で、具体的な実践報告を三名の方に、教材と参考資料を五名の方に寄稿して頂いた。現場で使用できる教材を意識して、実践的に活用できる内容を目指した。▽今号は桐蔭学園中学校男子部・同女子部・中等教育学校（中三）での出前授業「昔の文字を読んでみよう」の担当者に寄稿を依頼した。▽「実践報告」は、二又淳、真島望、稲葉有祐の三氏に取組をご紹介頂いた。「教材と参考資料」では、神林尚子、牧野悟資、高松亮太、勝又基、佐藤温の五氏にそれぞれ工夫を凝らした教材をご提示頂いた。▽編集は、広報企画委員会和本リテラシー部門の宮本祐規子（日本女子大学（非）／チーフ）・柳沢昌紀（中京大学／委員）・杉本和寛（東京芸術大学／副委員長・山田和人（同志社大学／委員長）が担当した。▽本誌は紙媒体で刊行し、さらに学会HPでWEB公開もしている。和本リテラシーの普及と発展のために、関係各位のさらなるご支援、ご協力をお願いしたい。

（山田和人）

